

元來東門跡なり。加賀原と世人は呼べりしかども、少し其地相違せり。加賀屋敷は今の金澤町の礎なり。門跡の井、今昌平橋北の方、原の西南入口に在り。』などあるのが参考となる。按ずるに此の邸跡は、後の加賀原にも金澤町にも互つたものと思はれる。因に言ふ、越登賀三州志來因概覽には、明曆三年七月九日筋違邸に、本多丹下・朝比奈左近・坪内惣兵衛三人に屬した同心邸を加へられたことを記すけれども、これは本郷邸に關する事實を誤つたものであらう。

スチカヒバシ 折違橋 金澤橋梁記にすぢかい橋とある。金澤町會所留記に載せた元祿元年十月捨子届書には、折違橋番人三右衛門と記せられ、元祿六年の土帳には、『すぢかい橋近所六枚町』ともあつて、倉月用水に架けた惣構の橋であつた。道路が曲つてゐたので、橋も斜に架けられた爲に起つた名稱である。

スチカヒバシテイ 筋違橋邸 明治三年五月前田氏は東京築地邸の返上を命ぜられ、その代りに筋違町内に在る福山侯阿部氏の舊邸七千六百四十坪を興へられた。この邸は筋違橋(今萬世橋)内とも、又相生橋(今昌平橋)内とも書かれてゐるが、同一の地である。同年八月また之を返上した。

スチカヒマチ 折違町 金澤の町名。元祿九年の地子町肝煎裁許附にも折違町とあつて、町名は折違橋があるによつて起る。

ステコ 捨子 捨子に就いては加賀藩の貞享四年四月の令に、『捨子有之時は早速不及屆、其所之着いたはり置直に養候敷、又は望之者有之候はゞ可遣候。急度不及付届候事。』との幕令を傳達し、元祿三年十一月・八年十

月・十三年七月にもそれを繰返されてゐる。江戸の邸外に捨子のあつた時は、一時之を藩邸に收容し、後に亦希望者に下渡した。

ステコシガハ 捨越川 ↓ミソギガハ 御畝川。

スナゴザカ 砂子坂 河北郡二俣内の小字。

スナゴゼンヤマ 砂御前山 能美郡白峰の部落から東北に當る山。高さ一三二六米。地質係羅系。

スナハセ 砂走 江沼郡潮津内の小字。

スノウ 須能 ノス 鹿島郡南三郷に屬する部落。

スノウタニ 須納谷 タスノ 能美郡白山下に屬する部落。

スノタニ 須ノ谷 江沼郡四十九院谷に屬する部落。大聖寺藩主前田利直の時、元祿八年八月奥山五右衛門・村山藤左衛門を奉行、中尾久右衛門を目付として、この村の用水工事を行はせた。

スバ 須場 羽咋郡深江内の小字。

スハマガハ 洲濱川 江沼郡に在る。廻國雜記に加賀の立花の次に洲濱川があり、その文に『洲濱川といひて、其妻さながら庭などに作りたるすはまに、少しも違ひ侍らず。そのまはり四五町にも餘りぬらんか、奇妙なる姿なり。里人の申侍りしは、相馬の將門作りたりなど語り侍りき。信用にたらず。すはま川誰すみすみてし遺水の跡とか見まし庭の傍』と記してゐる。洲濱川は大聖寺川の下流一部分の稱であらう。江沼志稿に『菱鶴紀開云。中古大聖寺川、此の領(上木村)砂山の岸を流れ、今の川田此の古川也。其の頃の川の様子

を村叟に尋問ふに、川底高く砂入りて、川あせ、渡越す所もあり。水出には堤崩れ、田地損ずる事度々也。今田の中所々にうろ有るは、田地に砂入りたるを片付けたる畔なりと云々。今案、此の邊古川の時分の事なるべし。すはま川といふ古歌あり。下福田・荻生の間にある柳瀬・櫻淵より、三ヶ村領矢義の水門より北に向ひて、上木領赤山の下を経て、砂山の岸を流るとあれば、其の曲節したる形、すはまに能く似たり。』とあるを以て、その位置を斷じ得る。

スハマクマノジンジャ 須濱熊野神社 能美郡須天に在つて、今須天熊野神社といふ。式内等舊社記に、『須濱熊野神社。須濱村鎮座。今稱熊野權現。』と見え、社藏の文書に洲濱熊野大權現ともある。

スヒサカ 吸坂 江沼郡上河崎の小字であるが、大聖寺藩では一村として取扱うて居た。須井坂又は睡坂の字を當てることもある。能美江沼退治留書に、慶長五年八月二日山口右京が家臣成田勝左衛門・山口源左衛門以下士卒少々を率ゐ、南郷の東吸坂を登り、その峠で前田勢の人數を測つたとある。後に大物見場といふものは是である。吸坂は現に獨立の部落を成さぬ。

スヒサカヤキ 吸坂燒 江沼郡吸坂に於いて製した陶器で、吸坂の土を用ひ、又は九谷の土を混用した。秘要雜集に『貞享二年三月普薩池久保次郎兵衛、吸坂山の土にて焼物仕初。やき物場上河崎領にわたる。』とし、菱鶴紀開には普薩池を普提池に作る。從來これは郡内普提村の領であらうとせられたが、京都の御普薩池の工人が來たのであらうとする説もある。しかしそれにしては、何人がこの陶窯を経営したか、又は如何にして京の陶工がこの地に來るに至つたかの研究が、尙殘されてゐるわけである。次に大聖寺藩御算用場年代記元祿十三年の條に『二月八日吸坂燒物師次郎兵衛、又當年より燒申度旨。依之黒瀬村領之内近邊に而、松木二榎買請申様願上、願之通被仰付、其通松奉行へも申渡す。』とあり、又江沼志稿には、『吸坂。昔陶器を製す。元祿十三年八月止む。中古宮丸屋宇兵衛瓦を燒き、暫くにして廢す。近年源太郎瓦を燒く。今廢す。また同人陶器を燒く。暫くにして廢す。』ともある。近年とは天保の初頃でもあらう。吸坂燒は雅味があつて、茶器に使用せられるものが多いから、古九谷燒よりも先行するものであるとするを從來の通説としたが、文獻の上からは貞享二年以前に溯ることができぬ。

スフソソセキ 圖譜村籍 ↓エツトガサン シュウシ 越登賀三州志。

スマキ 洲巻 珠洲郡若山庄に屬する部落。

スマキ 洲巻 珠洲郡東山中内の小字。

スマヒ 住居 ↓オスマヒ 御住居。

スマヒガバ 相撲ヶ馬場 白山の舊市・瀬温泉からの登山路に在る。越前名蹟考に、『半里許り登りて平かなる所あり。俗には相撲ヶ馬場といひて、初めて參詣の人にすまひとらすといふ。昔は室有て宿の跡と見えたり。』と記する。

スマフ 相撲 加賀藩で力士を敵すること

は、前田利長の時に順禮が居り、利常の時に相撲之者と稱するものが居たので知られるが、その後は絶えて之を見ぬ。土庶の角軀に